

Vascular

AIを搭載した進化する装置 ～Trinias Operaを導入して～



小林 俊博 先生

名古屋澄心会 名古屋ハートセンター 放射線科
小林 俊博

要旨

本稿では、島津社製 Trinias Operaの導入と、主にSHD (構造的心疾患治療) 領域における活用について報告する。Cアームの柔軟な可動やSketch機能によるマーキングなど、SHD治療に求められる操作性や効率性に焦点を当てた。さらに、カテーテル治療の質の向上に資する、AIフィルタを用いた臨床画像の提示や、SCORE Linkによる機能更新の特徴についても触れる。

1. はじめに

当院は2008年10月、名古屋ドームに程近い名古屋市の東に位置する砂田に開院した64床の循環器専門病院である (Fig.1)。母体は豊橋ハートセンターであり、その意思を受け継ぎ、24時間365日体制で救急患者の受け入れを行っている。5階建て1階に駐車場、2階に外来フロア、3階にカテ室・オペ室、4・5階が病棟である。外来にはCT装置1台、MRI装置1台、超音波装置7台(心臓5台、血管1台、他1台)あり、外来当日に全ての検査・結果説明が行えるように画像診断に尽力している。また、カテ室は4室あり、日帰りカテーテル検査(以下CAG)や経皮的冠動脈形成術(以下PCI)、末梢血管治療(以下EVT)、構造的心疾患治療(以下SHD)、不整脈治療等のカテーテル治療を分担して行っている。オペ室は2室で、人工心肺装置も2台あり緊急手術にも対応している。病院実績はFig.2に示す。

上記でカテ室は4室稼働と述べたが、島津製作所社製 Trinias B8s with SCORE Opera (以下 Trinias Opera : Fig.3) はハイブリッド室に導入されている。使用用途としては心臓領域と下肢領域のみならず、SHD治療まで幅広く使用している。

患者テーブルは手術台ではなくカテーテルテーブルを導入した。手術台と比較すると機能に制限があるものの、SHDははじめカテーテル治療をメインと



Fig.1 名古屋ハートセンター外観

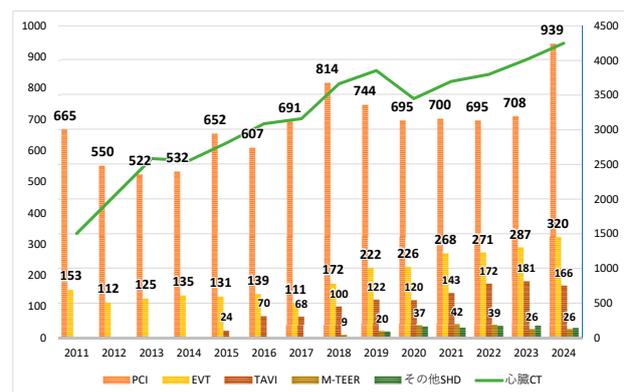


Fig.2 2011年から2024年までの名古屋ハートセンターでの手技別検査・治療実績



続きはこちら

医療従事者向け会員制サイト
「SHIMADZU MEMBERS CLUB」(無料)になります。
ご登録後にWEBで全文をお読みいただけます。